

興福寺中金堂再建記念特別展

# 運慶

UNKEI

The Great Master of  
Buddhist Sculpture

Commemorating the Reconstruction of  
the Kohfukuji Central Golden Hall

「プレスリリース」



東京国立博物館  
TOKYO NATIONAL MUSEUM



国宝 世親菩薩立像(部分) 奈良・興福寺蔵 写真:六田知弘

### 開催にあたって

日本で最も著名な仏師、運慶(生年不詳〜一二二三)。その卓越した造形力によって、まるで生きているかのような写実性にあふれる像を生み出し、輝かしい彫刻の時代を牽引しました。

運慶が活躍した平安時代から鎌倉時代にかけては、まさに動乱の時代でした。治承四年(一一八〇)に始まった源平の戦いは津々浦々に波及し、やがて政権は貴族から武士へと引き継がれてゆきます。このようななかで運慶は、平家の焼き討ちによって灰燼に帰した奈良の興福寺や東大寺の復興に尽力するとともに、貴族のみならず新興勢力である東国武士からの依頼を受け、仏像を制作したことが知られています。

運慶は奈良、京都に拠点を置いて仏師の工房を率い、多くの仏像を残しました。本覧覧会は、運慶と縁の深い興福寺の中金堂が約三百年ぶりに再建されるのを記念して開催するもので、これを機に各地の名品を一堂に集めて展覧いたします。

さらに運慶の父である康慶、息子の湛慶、康弁ら親子三代にわたる作品を通して作風の樹立から次代への継承をたどるとともに、最新の学術研究の成果も盛り込みます。これまでにない規模で、運慶芸術の真髄をたつぷりとご堪能いただける画期的な展覧会になると確信しています。

# ① 天才仏師・運慶の傑作が集結する、史上最大の展覧会

運慶は生涯に多くの作品を造ったとみられますが、運慶作あるいはその可能性が高いと考えられているのは、三十軀前後しかありません。それらは全国各地に分散し、寺院等に所蔵されているお像は門外不出の場合もあるため、大規模な運慶展はこれまで実現していません。

今回は、運慶と縁の深い奈良・興福寺の中金堂再建記念事業として企画し、同寺所蔵の運慶の作品が出品されます。さらに京都、和歌山、愛知、静岡ほか、各地で大切に守り継がれてきた仏像も結集することとなり、史上最大の運慶展が実現します。

# ② 父・康慶から息子・湛慶、康弁へ 運慶の作風の誕生と継承

京を中心に貴族が治めた平安時代から、東国・鎌倉に幕府を置き、武士が支配を広げた鎌倉時代へ。時代の変革期に、運慶は十二世紀に流行していた仏像の表現スタイル、定朝様とはまったく異なる新しい表現を生み出しました。生命力がみなぎる国宝「八大童子立像」(和歌山・金剛峯寺蔵)や肖像彫刻の最高傑作である国宝「無著菩薩立像・世親菩薩立像」(奈良・興福寺蔵)に代表される、迫真性に満ちた造形がみどころです。

本展では、運慶自身の初期から晩年までの作品を通覧するとともに、父・康慶、息子・湛慶、康弁ら親子三代の作品を加え、独自の造形の誕生とその継承という視点からも運慶作品を捉えます。

# ③ 博物館でたっぷり味わう運慶 お寺では見られない表情も

会場は、東京国立博物館平成館のスケールを生かした空間となります。国宝「無著菩薩立像・世親菩薩立像」を守るように、高さ二メートルを超える堂々とした体軀の国宝「四天王立像」(奈良・興福寺蔵、南円堂安置)が目の前に立ち並ぶ光景は、まさに圧巻。国宝「八大童子立像」(和歌山・金剛峯寺蔵)をはじめ多くの作品は、普段はご覧にならない後ろ姿を含め三六〇度全方位からご覧いただく予定です。展覧会ならではの展示方法でご覧いただくことにより、新たな運慶の魅力を発見できるでしょう。

# ④ 未来に引き継ぐ運慶 調査研究の最先端を紹介

運慶作品については、今もなお調査研究は進んでおり、新たな知見が加えられています。この十五年間に三件もの運慶作品、あるいはその可能性が高い作品が見出され、大きな注目を浴びました。さらに近年行われたX線CT調査によって得た像内納入品の映像も運慶研究を進展させました。本展では、こういった新発見もご紹介します。



国宝 無著菩薩立像(部分) 奈良・興福寺蔵  
写真:六田知弘

国宝 世親菩薩立像(部分) 奈良・興福寺蔵  
写真:六田知弘



# 第1章

# 運慶を生んだ系譜——康慶から運慶へ

運慶の生年は不明ですが、息子・湛慶が承安三年（一一七三）生まれてあること、  
 処女作と見られる円成寺の大日如来坐像（国宝）を安元元年（一一七五）に着手していることから、  
 おおよそ一一五〇年頃と考えられます。  
 平等院鳳凰堂の阿弥陀如来坐像（国宝、天喜元年（一一〇五））の作者である大仏師・定朝から  
 仏師集団は三つの系統に分かれましたが、  
 運慶の父・康慶は興福寺周辺を拠点にした奈良仏師に属して、いました。  
 院派、円派の保守的な作風に対して、奈良仏師は新たな造形を開発しようとする気概があったようです。  
 ここでは、運慶の父あるいはその師匠の造った像と、若き運慶の作品を展示し、  
 運慶独自の造形がどのように生まれたのか、その源流をご覧ください。

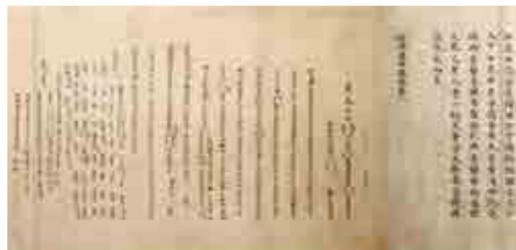


写真：飛鳥園

## 国宝 大日如来坐像

運慶作  
 平安時代・安元2年（1176）  
 奈良・円成寺蔵

台座の裏に墨書があり、運慶が「安元元年十一月廿四日」に造仏の注文を受けて造り始め、「同二年十月十九日」に完成した像を引き渡したことが知られる。銘文は運慶自身が書いたもので、末尾に「大仏師康慶実弟子運慶」と記し、署名している。現存するもっとも早い運慶の作品で、時間をかけて入念に造ったのだろう。洗練とした表情と体格、きれいに梳いた髪のかみなど写実的で、運慶の類まれな才能を感じることができる。 [貸出画像1]



## 国宝 運慶願経（法華経巻第八）

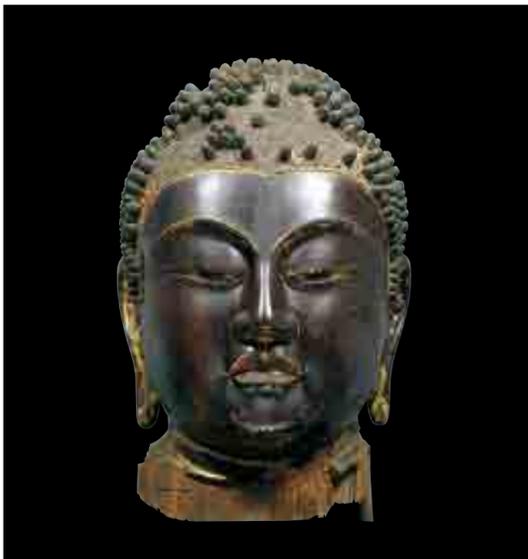
平安時代・寿永2年（1183）  
 治承4年（1180）、平重衡の軍勢が放った火によって東大寺、興福寺の主要伽藍が焼失した。運慶は幼少のころから両寺院の仏像、伽藍に親しんでいたはずで、深く胸に刻まれる事件だっただろう。焼け残った東大寺大仏殿の木を軸にして法華経八巻の書写を発願した。紙は工人に沐浴精進させて作らせ、水は比叡山横川、園城寺、清水寺から霊水を取り寄せて墨をすっている。巻第八の奥書に快慶をはじめ結縁した同僚の仏師の名前がある。



## 重要文化財 地藏菩薩坐像

康慶作  
 平安時代・治承元年（1177）  
 静岡・瑞林寺蔵 展示期間：10月31日～11月26日

像底、脚部の裏側に墨書された銘文により康慶の作とわかる。若々しい端正な表情、頬、顎や背面のやわらかな肉付き、着衣の表現などに写実表現が進んでいる。円成寺の大日如来坐像（PB）と作風が近く、運慶は父の影響を強く受けたことがわかる。



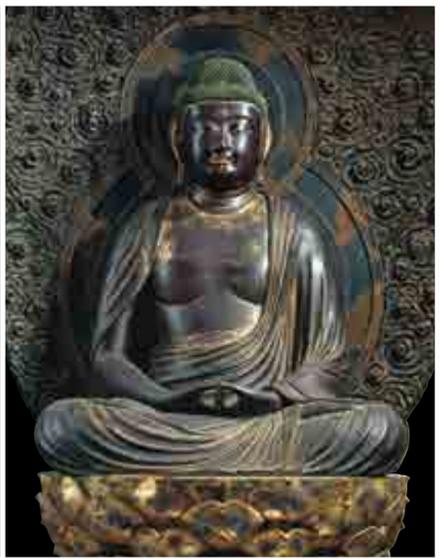
## 重要文化財 仏頭

運慶作  
 鎌倉時代・文治2年（1186）  
 奈良・興福寺蔵

享保2年（1717）に焼失した興福寺西金堂の本尊、釈迦如来坐像の頭部として伝来した。鎌倉時代の興福寺の記録によると「文治二年正月二十八日」に運慶が大仏師として完成した像の堂内安置に関わったことが知られる。従って運慶が造像したと見られるが、同じ年に造った願成就院の阿弥陀如来坐像との作風に開きがあり、運慶がどこまで関与したかははっきりしない。



勢至菩薩坐像



阿弥陀如来坐像



観音菩薩坐像

写真：飛鳥園

## 重要文化財

## 阿弥陀如来および両脇侍坐像

平安時代・仁平元年（1151）  
 奈良・長岳寺蔵 展示期間：阿弥陀如来坐像と観音菩薩坐像は9月26日～10月29日

定朝が完成させた和様彫刻（定朝様）は胸腹部が薄く、衣の襷は浅い程やかな作風が特色で、平安時代後期に広く流行した。しかし、この像は張りのある肉付きと写実的な衣文が際立ち、鎌倉彫刻の兆しが見られる。三尊とも目に水晶の板をはめており（玉眼）、制作年代がわかる像ではもっとも早い例である。長岳寺は奈良県天理市にあるため、奈良仏師の作と考えられる。運慶が生まれたのは、この像が造られたころである。

# 第2章

# 運慶の彫刻——その独創性

文治二年（一一八六）に運慶が造った静岡・願成就院の阿弥陀如来坐像、不動明王および二童子立像、  
 毘沙門天立像（いずれも国宝）の五軀には全く新しい、独自の造形が見られます。  
 建久八年（一一九七）頃の高野山金剛峯寺の八大童子立像（国宝）は人念な玉眼の表現、  
 立体的に表した頭髪と墨描した後れ毛などが写実性に富み、感情までも表現されています。  
 晩年の無著菩薩立像・世親菩薩立像（いずれも国宝）は、圧倒的な存在感と精神的な深みが感じられます。  
 鎌倉時代の人々が仏像に求めたのは、仏が本当に存在するという実感を得たい、ということだったでしょう。  
 運慶はその要求を受け止めて、余すところなく応えたのです。



写真：六田知弘

## 国宝 毘沙門天立像

運慶作  
 鎌倉時代・文治2年（1186）  
 静岡・願成就院蔵

像内に納められていた五輪塔形の銘札の墨書から、文治2年（1186）に北条時政の発願により運慶が造ったものとわかる。北条氏の本拠地である伊豆蓮山に創建された願成就院に安置されている5軀のうちの1軀。引き締まった体で左に腰を捻って立ち、力がみなぎって今にも動き出しそうである。武将のような顔つきも毘沙門天像にはめずらしい。奈良と伊豆のどちらで制作したかは不明だが、願成就院の像には運慶の独創性がいかに発揮されており、この時までに独自の作風を樹立したことが知られる。鎌倉幕府の御家人にこの作風が喜んで迎えられ、東国が慶派仏師の活躍の場になった。 [貸出画像2]

国宝 世親菩薩立像（部分） 奈良・興福寺蔵 写真：六田知弘

国宝 大日如来坐像（部分） 奈良・円成寺蔵 写真：飛鳥園

重要文化財 阿弥陀如来坐像および両脇侍立像

重要文化財 不動明王立像

重要文化財 毘沙門天立像

運慶作  
鎌倉時代・文治5年(1189)  
神奈川県・浄衆寺蔵 阿弥陀如来坐像および両脇侍立像は期間限定展示

不動明王立像と毘沙門天立像に納入されていた銘札により、鎌倉幕府の有力な御家人である和田義盛とその夫人の発願により、運慶が造ったことがわかる。阿弥陀如来坐像および両脇侍立像は肥満した体と生氣のある表情で存在感と現実味に富む。不動明王像と毘沙門天像は、願成就院像の斬新に比べて古典的である。両者の違いの理由は不明だが、発願者の好みを反映したとも考えられる。



毘沙門天立像  
写真：六田和弘



阿弥陀如来坐像および両脇侍立像  
写真：鎌倉国宝館(井上久美子)  
【貸出面像4】



不動明王立像  
写真：六田和弘



恵光童子



制多加童子  
【貸出面像3】



矜羯羅童子



恵喜童子



清浄比丘童子



烏俱婆識童子

国室 八大童子立像のうち  
恵喜童子・清浄比丘童子・烏俱婆識童子・  
恵光童子・制多加童子・矜羯羅童子

運慶作  
鎌倉時代・建久3年(1197)頃  
和歌山・金剛峯寺蔵

平安時代後期、12世紀作の不動明王像に随う八大童子として造られたもので、6軀が運慶作、2軀は後補である。八条女院という高貴な女性の発願だからか、経典で性悪とされる制多加童子が理知的な顔に造られるのをはじめ、いずれも上品な姿である。玉眼は視線の強さ、あるいは聡明さを巧みに表し、生きて見えるように見える。造像時の華やかな彩色もよく残っている。運慶作品の中でも完成度の高さを屈指の作である。

写真：高野山霊宝館



世親菩薩立像  
[貸出画像8]

写真:六田知弘



無著菩薩立像  
[貸出画像7]

写真:六田知弘

### 国宝 無著菩薩立像・世親菩薩立像

運慶作  
鎌倉時代・建暦2年(1212)頃  
奈良・興福寺藏

北円堂は、奈良時代に藤原不比等の供養のために建立されたが、治承4年(1180)の兵火で焼失。復興は遅れ承元2年(1208)によりやく造仏が始まった。弥勒如来坐像と両脇侍像、二羅漢、四天王像の造像は運慶統率のもと6人の子、4人の弟子たちが分担した。

無著、世親は5世紀、北インドに実在した学僧で、法相教学を体系化したことで知られる。無著が兄、世親は弟であり、2軀の像は老年と壮年に作り分けられている。2メートルに迫る巨体に厚手の衣を着け、大ぶりの衣文を作って重厚な存在感を表す。一方容貌は無著の静、世親の動と対照しつつ精神的な深みを加えている。世界的な傑作と言って良い。



大威徳明王坐像

写真:神奈川県立金沢文庫

### 国宝 四天王立像

鎌倉時代・13世紀  
奈良・興福寺藏(南円堂安置)

ダイナミックな動きが卓越した像。装飾の豊かな甲や着衣の表現も見どころである。本来南円堂にあったのは仮講堂(旧称:仮金堂)に安置される四天王像であることがわかったため、現在南円堂に置かれるこの四天王像がどこにあったかが問題になっている。最近では北円堂のものとする意見に賛同する研究者が増えている。北円堂の像は運慶を大仏師として4人の子、湛慶・康運・康弁・康勝が1軀ずつ分担して造ったことが知られるため、北円堂の像と確定すれば運慶の作品が4軀増えることになる。



広目天像

増長天像

持国天像

多聞天像  
[貸出画像6]

写真:飛鳥岡



### 重要文化財 大日如来坐像

鎌倉時代・12~13世紀  
東京・真如苑藏

13年前に初めてその存在が知られるようになった像。髻の形、容貌など運慶風が濃厚である。伝来は不明だが、栃木・光得寺の大日如来坐像(P16)と形式、像内納入品など類似点が多い。そのため、この像も光得寺像と同様、鎌倉幕府の重鎮、足利義兼に関わる像とする説がある。運慶作の可能性が高いが、なお慎重な検討が必要である。



### 重要文化財 地藏菩薩坐像

運慶作  
鎌倉時代・12世紀  
京都・六波羅蜜寺藏

体の中心部分を一材から造る一木造の像で、像底を削り残すが上げ底式にはしないなど運慶が造った像の中では異色である。しかし、胸を張った堂々とした体軀と深く動きのある衣文は、願成就院の阿弥陀如来坐像に通ずる。袈裟の端が左袖の上にかかる部分では袖の衣文を彫った上に別の小材を貼り付けて表している。奈良時代の乾漆造の仏像に似た手法である。運慶作と見て間違いのないが、制作年代については意見が分かれている。

### 重要文化財 大日如来坐像

鎌倉時代・12~13世紀  
栃木・光得寺藏

像と同時期の厨子・光背・台座が残る貴重な作例。削り上げた像底にL字の金具を2個取り付けて、台座に付けた環に挿し込んで固定する。台座の心棒を厨子の底板にあげた穴に落とし込み、光背裏面と厨子後壁を金具でつなぐ。これによって亡失、盗難を免れ、火災などの時も安全に移動できたのだろう。像内に五輪塔形の木柱、水晶珠を納入する。これは仏の魂ともされる心月輪である。像内をはじめ周到な工作も運慶の創意によるものと考えられる。

### 重要文化財 大威徳明王坐像

鎌倉時代・建保4年(1216)  
神奈川・光明院藏

平成19年(2007)に行なわれた解体修理で像内納入品が発見され、巻物の奥書に「源氏大武蔵」が発願し、建保4年、運慶によって造られた旨が記されていた。発願者は源頼家、実朝の乳母である大武局と見られる。小さな像で欠失部分はあるが、運慶最晩年の作として貴重な像である。



大日如来坐像



写真:六田知弘

### 重要文化財 聖観音菩薩立像

運慶・湛慶作  
鎌倉時代・正治3年(1201)頃  
愛知・瀧山寺藏

建久10年(1199)に没した源頼朝の供養のため、頼朝の従兄弟にあたる僧・寛伝が造った像。『瀧山寺縁起』には、聖観音像の像内に頼朝の髪と歯が納められたと記され、X線写真により、頭部内に納入品が確認されている。脇侍の梵天・帝釈天を合わせ三尊とも作者は運慶・湛慶とする。肉付きの良い体軀と写実的な着衣の表現など運慶の特色が顕著で、『瀧山寺縁起』の記述は信用できる。表面の彩色は後補。聖観音菩薩立像が寺から外に出るのは初めてである。 [貸出画像5]

寺外  
初公開!

15

# 運慶風の展開——運慶の息子と周辺の仏師

運慶には六人の息子がおり、いずれも仏師になっています。そのうち、単独で造った作品が残るのは湛慶・康弁・康勝です。ここでは湛慶と康弁の像を展示します。運慶の後継者として十三世紀半ばまで慶派仏師を率いた湛慶は多くの作品を残しました。快慶とともに造像したこともあるためか、運慶の重厚な作風より快慶の洗練に近づいています。しかし、京都・高山寺の牡牝一對の鹿や子犬（いずれも重要文化財）、高知・雪隠寺の善膩師童子立像（重要文化財）などの写実性と繊細な情感表現は、運慶風を継承したものです。康弁作の龍燈鬼立像（国宝）は力士のようなモデルの存在を思わせる筋肉の表現において、より直接的に運慶とつながっています。このほか、運慶にきわめて近い作風の像を展示します。



巳神 辰神 卯神 寅神 丑神 子神

亥神 戌神〔貸出画像9〕 酉神 申神 未神 午神

写真（静嘉堂文庫美術館所蔵分）：京都国立博物館（岡田愛）

## 重要文化財 十二神将立像

京都・浄瑠璃寺伝来  
鎌倉時代・13世紀  
子神・丑神・寅神・卯神・午神・酉神・亥神：東京・静嘉堂文庫美術館蔵  
辰神・巳神・未神・申神・戌神：東京国立博物館蔵

九体阿弥陀と浄土庭園で知られる浄瑠璃寺に伝来した像。明治時代初頭に寺を離れ、民間に流出したが、現在は静嘉堂文庫美術館と東京国立博物館の2カ所の所蔵となっている。この12軀が一堂に会するのは、昭和50年（1975）に東京国立博物館が開催した「鎌倉時代の彫刻」展以来である。12軀の表情、姿勢は変化に富み、像表面に施された装飾も造られた当時のものがよく残っている。明治35年（1902）11月22日付けの毎日新聞の記事に「大仏師運慶」という銘があったと紹介されていることが最近話題になったが、その銘文はまだ確認されていない。

42年ぶりに  
12軀勢ぞろい!

## 重要文化財 子犬

鎌倉時代・13世紀  
京都・高山寺蔵

高山寺は明恵上人が中興した寺。上人は湛慶を信頼したらしく、高山寺には牡牝の鹿、狛犬ほか湛慶作と見られる像が数多く伝わっている。子犬の彫像もそのひとつで、むくむくした愛くるしい姿は、上人の心を潤しただろう。善膩師童子像とこの子犬の像は見る者に温かな気持ちを起こさせる点で共通している。

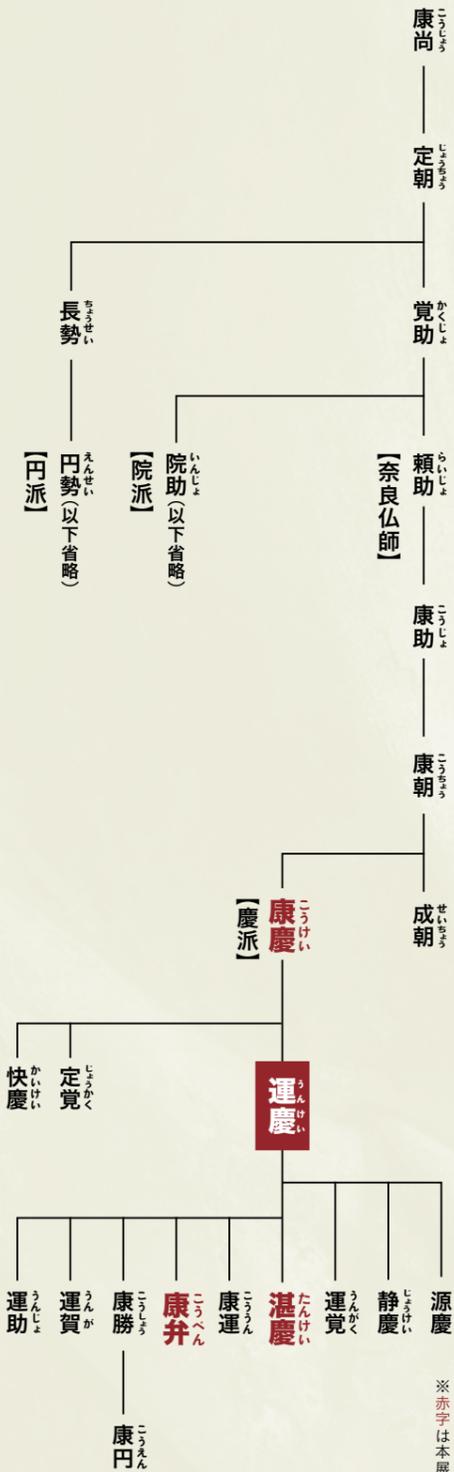


【運慶年表】

年号	西暦	事項
安元二年	一一七六	円成寺・大日如来坐像を完成
治承四年	一一八〇	平重衡が東大寺、興福寺に火を放つ。この後、運慶が復興に携わる
寿永二年	一一八三	法華経八巻の書写を発願
文治二年	一一八六	一月、興福寺西金堂・本尊釈迦如来坐像を大仏師・運慶が堂内に安置 五月、北条時政発願の静岡・願成就院の諸像を造る
文治五年	一一八九	和田義盛発願の神奈川・浄楽寺の諸像を造る
建久四年	一一九三	足利義兼発願の栃木・樺崎寺(廃絶)の大日如来坐像を造る
建久八年	一一九七	高野山一心院不動堂に八大童子像を造るといふ
建久十年	一一九九	これ以前に足利義兼のために大日如来像を造るか
正治三年	一一〇一	湛慶とともに瀧山寺の諸像を造るといふ
建仁三年	一一〇三	快慶・定覚・湛慶とともに東大寺南大門の仁王像を造る
承元二年	一一〇八	興福寺北円堂の造仏開始
建暦二年	一一二二	源慶・静慶・運覚・湛慶らとともに造った興福寺北円堂仏像が完成
建保四年	一一二六	十一月、実朝の乳母大式局発願の仏像を造る
貞応二年	一一二三	十二月十一日、運慶没

関連作品(大字は出品作品)	国宝 大日如来坐像(奈良・円成寺)
国宝 運慶願経	
重要文化財 仏頭(奈良・興福寺)	
国宝 阿弥陀如来坐像、不動明王及び二童子立像、毘沙門天立像(静岡・願成就院)	
重要文化財 阿弥陀如来坐像及び面臨侍立像、不動明王立像、毘沙門天立像(神奈川・浄楽寺)	
重要文化財 大日如来坐像(真如苑)がこれに当たるか?	
国宝 八大童子立像のうち六軀(和歌山・金剛峯寺)	
重要文化財 大日如来坐像(栃木・光得寺)がこれに当たるか?	
重要文化財 聖観音菩薩立像、梵天、帝釈天立像(愛知・瀧山寺)	
国宝 金剛力士立像(奈良・東大寺)	
国宝 弥勒如来坐像、無著菩薩立像・世親菩薩立像(奈良・興福寺)	
重要文化財 大威徳明王坐像(神奈川・光明院)	

【系統図】



※赤字は本展に作品が出品されている仏師

※本展では、鎌倉時代を1185年～としています。



写真:奈良国立博物館(佐々木香輔)

国宝 重源上人坐像

鎌倉時代・13世紀  
奈良・東大寺蔵 展示期間:10月7日~11月26日

建永元年(1206)に没した俊乗房重源の肖像彫刻。作者は不明だが、老貌の迫真の描写から運慶作と見る説がある。大仏と大仏殿をはじめとする東大寺伽藍の再興という難事業を不屈の精神力で成し遂げた人柄が偲ばれる傑作である。



重要文化財 毘沙門天立像・吉祥天立像・善膩師童子立像

湛慶作  
鎌倉時代・13世紀  
高知・雪隠寺

毘沙門天像の足柄に書かれた銘文により、湛慶の作とわかる。若い武将のような容貌と左に腰を捻って立つ姿は運慶が造った願成就院の毘沙門天立像(P10)に似ている。しかし力みなぎる運慶の像に比べると胴が長く、ゆったりと構えている。むしろ湛慶の真骨頂は善膩師童子像に見られる。小首をかしげ、つぶらな瞳で上方を見つめるこの童子像ほど可憐な姿の彫像は類を見ない。



龍燈鬼立像 [貸出画像 11]

天燈鬼立像 [貸出画像 10]

写真:六田知弘

国宝 天燈鬼立像・龍燈鬼立像

康弁作  
鎌倉時代・建保3年(1215)  
奈良・興福寺蔵

龍燈鬼の像内に納入されていた文書に建保3年、康弁によって造られたことが記される。龍燈鬼の頭上に乗せた燈籠を上目遣いで見る顔は、滑稽である。げじげし眉毛を切り抜いた銅板で作り、牙は水晶製。両腕、臀部、大腿部の筋肉表現は鍛え上げた人物を傍にして彫ったと思えるほど写実的である。東大寺南大門の金剛力士像に通ずるもので、康弁が運慶から学び、継承したことがわかる。

興福寺中金堂再建記念特別展

# 運慶

UNKEI The Great Master of Buddhist Sculpture  
Commemorating the Reconstruction of the Kohfukuji Central Golden Hall

会期 2017年9月26日(火)～11月26日(日)  
会場 東京国立博物館 平成館(上野公園)  
TOKYO NATIONAL MUSEUM (UENO PARK)

休館日 月曜日  
※ただし10月9日(月・祝)は開館  
開館時間 午前9時30分～午後5時  
※金曜・土曜および11月2日(木)は午後9時まで開館  
※入館は閉館の30分前まで

主催 東京国立博物館、法相宗大本山興福寺、朝日新聞社、テレビ朝日  
協賛 あいおいニッセイ同和損保、大和証券グループ、凸版印刷  
協力 神奈川県立金沢文庫

展覧会公式サイト <http://unkei2017.jp/>

お問い合わせ 03-5777-8600(ハローダイヤル)

## ●観覧料金(税込)

一般	1,600円	(1,400円／1,300円)
大学生	1,200円	(1,000円／900円)
高校生	900円	(700円／600円)

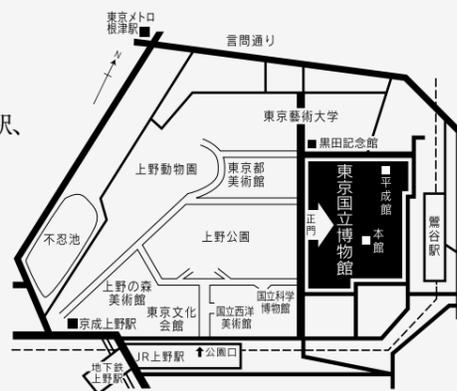
※中学生以下無料。 ※障がい者とその介護者1名は無料(入館の際に障がい者手帳などをご提示ください)。  
※( )内は前売／20名以上の団体料金。 ※前売券は7月1日(土)～9月25日(月)まで販売。  
※チケット取り扱い:東京国立博物館正門チケット売り場(窓口、開館日、前売券・当日券のみ)、展覧会公式サイト、主要プレイガイドほか。

## ●交通案内

JR上野駅公園口、鶯谷駅南口より徒歩10分  
東京メトロ銀座線・日比谷線上野駅、東京メトロ千代田線根津駅、  
京成電鉄京成上野駅より徒歩15分

## TNM 東京国立博物館 TOKYO NATIONAL MUSEUM

〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9  
東京国立博物館ウェブサイト <http://www.tnm.jp/>



## ●報道関係お問い合わせ

◇「運慶展」広報事務局(ウインドム内)  
TEL. 03-6661-9602 FAX. 03-3664-3833 E-mail:unkei@windam.co.jp  
〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9-4F「運慶」展広報事務局

※表紙写真:(右)国宝 八大童子立像のうち制多伽童子(部分) 和歌山・金剛峯寺蔵 写真:高野山霊宝館 (左)国宝 無著菩薩立像(部分) 奈良・興福寺蔵 写真:六田知弘  
※裏表紙写真:(右)国宝 天燈鬼立像(部分) (左)国宝 龍燈鬼立像(部分) 奈良・興福寺蔵 写真:六田知弘

## 興福寺中金堂



中金堂の完成予想図

奈良・興福寺は和銅三年(七一〇)の創建で、千三百年の歴史を誇る仏教寺院です。その長大な歩みは一面で、焼失と再建の繰り返しかえしでした。そのなか、治承四年(一一八〇)の南都焼討ちでは、文字通り一山灰燼に帰しましたが、その後の復興は、仏教美術のルネサンスともいわれ、教学復興とともに前代にみない清新な造仏活動が行なわれました。その代表が康慶率いる慶派いわゆる奈良仏師で、その息男・運慶に至って、鋭い写実性に基づく躍動感や、深い精神性に由来する仏教世界の寂靜が余すところなく表現されました。興福寺北円堂の本尊に随侍する無著・世親の菩薩立像は、仏師運慶の到達した境地を如実に示す作例といわれています。

興福寺では現在、境内の史跡整備を鋭意実施していますが、その中核事業が、享保二年(一七一七)に焼失したままになっている中金堂の再建です。再建造営は多くの方々のお力添えにより順調に進捗し、来年夏には工事が完了し、十月七～十一日に落慶法要を厳修する運びです。

鎌倉復興に活躍した仏師運慶の作例に、現代興福寺の境内史跡整備・中金堂再建造営を重ねて味わっていただければ、幸いです。

興福寺貫首 多川俊映

興福寺中金堂は伽藍の中心堂宇となる重要な建物です。和銅三年(七一〇)に創建者である藤原不比等が発願して、和銅七年(七一四)に竣工しました。中金堂は平安時代以降、七回もの焼失と再建をくり返してきましたが、江戸時代に再建された堂は、本来の姿にはほど遠く、仮堂として建てられたものでした。そこで、平成三年(一九九二)に境内整備委員会を立ち上げ、平成十二年(二〇〇〇)には仮堂のままになっていた中金堂を解体し、本格的な天平様式の金堂再建に着手しました。このたび約三〇〇年ぶりによりみがえる中金堂の再建は、創建当初の復元を目指し、古様を守りながら、現代の建築様式を随所に取り入れ工事が進められています。創建当初の図面は伝わっていませんが、記録や発掘調査の結果から、当初の中金堂規模は東西三六・六メートル、南北二三メートル、最高高二・二メートル、寄棟造、単層・裳階付きとわかりました。二〇一〇年に立柱式、二〇一五年に鴟尾の据付を終え、現在建物は九十五パーセント完成しており、二〇一八年の落慶に向けて、残る作業は僅かとなっています。

興福寺中金堂落慶法要二〇一八年十月七～十一日

展覧会公式サイト <http://unkei2017.jp/>

